

從	と	心	す	穉	可	魔	法	三	に
の	轉	は	ち	穉	に	が	有	印	は
修	か	轉	は	穉	に	在	主	は	つ
結	る	マ	は	穉	に	在	ふ	は	て
の	こ	マ	は	穉	に	在	字	三	六
心	こ	と	は	穉	に	在	字	三	六
は	が	し	は	穉	に	在	字	三	不
て	日	て	は	穉	に	在	字	三	善
と	在	初	は	穉	に	在	字	三	知
念	信	ハ	は	穉	に	在	字	三	と
と	の	マ	は	穉	に	在	字	三	な
念	心	止	は	穉	に	在	字	三	ん
成	の	マ	は	穉	に	在	字	三	達
し	一	マ	は	穉	に	在	字	三	磨
と	の	マ	は	穉	に	在	字	三	の
念	心	マ	は	穉	に	在	字	三	所
成	の	マ	は	穉	に	在	字	三	に
し	一	マ	は	穉	に	在	字	三	は
と	の	マ	は	穉	に	在	字	三	は
念	心	マ	は	穉	に	在	字	三	は
成	の	マ	は	穉	に	在	字	三	は
し	一	マ	は	穉	に	在	字	三	は

五作の

三印は法三摩耶と云ふは同い

以上三摩耶

廻轉

と善化し止む所が有い。心自信の因望し

正然正有い、善化そのものである心には安定し

これは有子の尻尾と云うことく回する小猫の癖と云う。

正おめりることにはある。心は

然ん現象心を起す

あつて雲信の正作と云ふ

心正作と云ふ

このかたきい没して出帆の期自しと論考も云

ふ。この竹善化をのとりである自分なり心

化と病かい観てなる者がある。観る者あり

から善化を善化と認識出来る。この観る者と

佛と云ふ。Cognito ergo sum と云ふ。この観る佛を

(四十二) 女子出定) 昔 ^{あうけ} 世尊の所 ~~所~~ 居

が集會が終つて、各々その國に歸る所となつた。

この時一女人があつて後の佛座に近づく ^{指定} 三昧に

入つてゐた。そこで文殊は世尊に由かた、何

ゆゑに女人は佛座に近づくことと符て我の符を

いのが、佛が文殊の苦いから、一歩をい此の女と

違ふし三昧より起して沙彌がから之に向はし。

文殊は女人の周圍と巡り、指を指らること一

下して、上 ^{色界の四王の宮} 天に ^{連れに行つた} 其の神力を尽して

みちが出定させることが出来た。世尊が

は三昧苦行が来たが、下は

禪定は心意識、知情意の

三つは人が物作らるるに在り、此が禪居を如く
大自のその心の如くある

活動が停止した **心** 知性、活動が停止した

は、知覚の活動が待てずとす

は、禪定その心の行方い。活動の知覚は待てず

と、**心** 知覚の活動が待てずとす

禪定と云ふは、**心** 知覚の活動が待てずとす

如何なる身心の活動も禪定は待てずとす

る。禪定は人が物作らるるに在り、此が禪居を如く

と云ふ。 **心** 知覚の活動が待てずとす

知覚とは別箇の行力を精んじ、印地の菩薩の如く

と云ふ。 **心** 知覚の活動が待てずとす

の活動からせしは禪定が

かししと云ふが、宿業のまかりて出離の地は
 きん底の地獄の思ひも延陀の苦難と越ゆる
 ものの所はあらして、その中（東部の）に包まれて居る、
 その方方（西）ははれてゐる。又強か暗儀する事
 慧は大観すれば人衆の業識であり、親業が（西）
 いと焔惱の地獄はは個人の罪業であるが、よく
 考へれば（西）ははた登り道と降り道の風光の
 相違である切けで密法同のもの、一つもので
 ある。さうした智慧、業識、業縁、焔惱、罪
 業の生まれと束る元が行的意味で稜定三昧と



云はれる 生命自作 である。この両者が一つも

の である 予を 焔焔 ^{焔焔} 即菩提」と云ふ。佛敎の奥義

である 人麁の 最高の 叡啓 ^{マイト} である 摩訶心珠 (布

斗麻廷) は 人麁の 菩提から 離れ 七別面の ものの

である の どの あり ^{智慧と焔焔をひくもめ} その 人向の 菩提を 精煉し

組織した ものに 地有らぬ。文珠の 智慧も 園明

の 行力も 大縁定 とも の 自由な 記述 され びあ

つて、云縁が 園明に 照れ くと、それ がある 殊

の 面目 であり 個性 である から、その 素手 一風

流 (五百卷) (中五則) 有文 唯 (菩提) である わけ

である。有るべきやうに有つたといけの事である。

云ふ。言ふは善くして佛に共遊するはらう

佛の語を以てす。(方便)と云ふ。佛の

言はるとその法則と用ふるは佛の

切實に法を説くこと云ふ。摩尼の

つて悟つたならは直ちにその摩尼の

道場を法に授けよ。